造園雜誌

第七卷

昭和十五年十二月

第三號

論説及資料

明治神宮境域管理

正會員 石 神 甲 子 郎

明治神宮内苑の御造營は、神社奉祀調査會官制公布以來前後八箇年の長年月と、約 522 萬圓の國費を要せる曠古の大事業にして、祭儀神寶等に關する件を初め、社殿、參道、林苑等各般の事項に亘り、周密なる調査研究の結果完成を見たるものであつて、之を造園史上より顧る時は、此の明治神宮御造營てふ盛事に依り、明治維新以來兎角衰退の途を辿り來りし我造園界に、俄然劃期的飛躍を誘致せる記念すべき一大傑作である。御造營の經過に就ては明治神宮造營誌其他二三の書籍に依り概略を知るを得べく、茲には御鎮座後の境域の狀況に就て昭和二年より同十年の八年間維持管理に依り感得せる事項に就て述べて見度いと思ふ。

一、參 拜 者

明治神宮の參拜者は別表統計の示す如く大正九年十一月御鎮座以來昭和十四年末迄に、總計 77,943,179 に達し、近時は年々増加の傾向を示し、特に滿洲事變以來非常時日本の聲と共に激增を來し、昭和九年度以來一ケ年約五百萬人以上に達する盛況を呈した事は洵に喜びに堪へない現象である。而して神宮の祭典は大祭 3、中祭 8、小祭 14、恒例式 7 の合計 32 回であつて、此の内（4 月 11 日）昭憲皇太后祭、（7 月 30 日）明治天皇祭、（11 月 1, 2, 3 日）鎮座記念祭、例祭、明治節祭、（12 月 31 日より 1 月 1 日）除夜祭、元旦祭の 4 回は參道に庭燎を點じ、若干の照明裝置を設備して、夜間參拜を許す例となつて居る。就中參拜者の特に多いのは、明治節例祭と、元旦の初詣とであつて、兩日共に一日に百萬人前後の大群衆の參拜を見る爲めに、玉垣内建設物の規模既に狭少を感ずるに至り、さしも 22 萬坪に亘る廣大な神域も、頗る混雜を來し、參拜者群衆の交通整理に甚だ困難な狀況を呈して居る。

此の湧き起る潮の如き大衆の參拜者に接する時は、彼の明治神宮御鎮座に際し、極めて限

られたる小數人の意見であつたが、明治神宮が帝都に廣大なる面積を占め、巨額の國費を以つて御社殿を造營致す事を、無益なる事として反對し、國民の非難を被つた者があつたが、此の如きは如何にも我國民の民族性を無視せる、唯物的誤つた考へであるかと云ふ事を明確に實證せられる次第である。由來我國民は部落を成す處、必ず其の團結の中心として、神社を造營するのが衆知の事であつて、大都市には大都市に相應しい神社の鎮座せらるるが望ましく、此の意味に於て、東京市に於ける明治神宮の御鎮座、名古屋市に於ける熱田神宮の如き眞に理想的と云ふべく、彼の新開都市たる横濱市、横須賀市の如き、歴史新しき爲、眞に大都市たるに相應しき神社の鎮座無く、市民の精神的不足感を充たし得ず遺憾に思はれる。此の意味よりも、我國の都市計畫に於ては、神社は都市の最も重要なる中心施設として、頭初より計畫すべき、最も大切なものであると信ずる。明治神宮が帝都東京市に御鎮座あらせられし爲に、我東京市民、引いては全國民に及ぼせる精神的感化は實に偉大なるものあり、殊に滿洲事變、支那事變等の非常時に際しては更に一層其の有難さを感じ得る次第である。

二、建築物

御社殿初め諸種の建築物、各参道の配置等は、御造営當時の技術者が必生の考究を重ねて築造せられたものであるが、御鎮座後の實際使用に當つては、世運の進化と共に、諸設備に多少不便の所も生じ、特に前述の如く、一日百万人に及ぶが如き大群衆の参拜があらうとは全く豫期せぬ處であつたので、各方面に諸種の支障を來し、改築又は増設を行ひし個所もあり、尙今後改善すべき懸案も存する次第である。

1、社務所、御社殿と社務所との距離が約四町存する爲めに、事ある毎に御神前と社務所との連絡に支障を來す事多く、毎日社務遂行上に尠からず不便を感じて居る。之は萬一の場合御社殿に對する防火上の考慮や、舊御殿の存在、

明治神宮平面圖

参道車道の配置等の關係上今日に於ては如何とも致し難い問題であるが、今後神社御造営等の場合には成るべく御社殿と社務所と隣接する方が、社務執行上便宜と考へる。而も社務所の建坪が狭少である爲めに、大正十二年二倍大に増築せられたが、今尙貴賓室等無く、潔齋行事等にも不備な状態であり、暖房設備其他改善を要する點が多い。但し先般御下賜せられた舊青山御所御殿の一部が舊御殿庭内に移築中であつて、之が完成すれば上記の不備は解消する事であらう。

2、神饌所と宿衛舎、神饌所と宿衛舎とも亦御社殿の東西に分れて建てられ、且つ相當の距離ある爲めに、祭事諸

役に不便を感じる事多く、之亦成る可く御社殿の同側に接近して配置せらるる事が望ましく思はれる。尙宿衛舎の建坪も比較的狭少である爲めに、御社殿直前の神職詰所としての任務遂行に兎角不便の點が多く見受けられる。

3、奉賽殿、社務所並に宿衛舎の狭小不備なるを補ふ爲めにも、亦多くの参拜者よりも、近年特に施設を希望せられて居るのは、奉賽殿の新築であつて、御神樂等の奉納や、諸種の奉賽式を取扱ふ場所として、第二大鳥居西北邊に敷地を豫定されて居るが、未だ實現を見る迄に至つて居らぬ。年を経ると共に熱心なる参拜者の増加は、御祭神に對し奉り、心よりの崇敬、報恩、感謝、祈願等の現れとして、只拜殿前に額付くのみ参拜の現状には、何となく物足りぬ感を抱く人が多い様である。即ち明治神宮が國家の宗祀たる神社として専ら神聖、嚴肅なるのみならず國民に取つては、民衆の崇敬、信仰の對稱として参拜する人々が、年と共に増加して行く傾向にて、その點に對しても相當の考慮を拂はれ度いものと思ふ。

熱心なる参拜者の一例としては、昭和八年來日本精神の修養を志した人々が集ひ、舊御殿北側に石敷の水行場を新設し、毎早朝淨水を以つて禊をなし、白衣に着更へ、明治天皇の御製を奉唱して御座所前に靜座し、鎮魂を行ひ、然る後に御神前に恭しく参拜して、敬神報恩の誠を捧げ、且つは神ながらの道に則したる、精神修養に勉めて居る。此の一團は行の會と名付け、寒中と雖も熱心に此の行事に勤み勵んで居た。水行場も最近本建築の禊舎に改築せらるる豫定である。

4、拜殿、拜殿が參道より一段高く石壇上に建設されてある爲に、建築物の尊嚴の上よりは洵に結構であるが、之を参拜者利用の點より見る時は、拜殿前軒下の石壇上平地の面積狭少な事と、更に前面に石階存し而も之を三つに區分する縦の縁石がある爲めに、一日5—6萬人以上の参拜者を數ふる時は、石段の昇降に甚だ混雜を極め、拜殿に近寄り難く、特に老幼子女の如きは危険の恐が多い、此の爲め明治節と元旦の初詣との大群衆参拜の折は、拜殿と樓門との中間十字路にて停むるか、拜殿前石階下に臨時柵を取設けて茲に止め、之より左右松樹の間に、巾二間の臨時的廻路を設けて、参拜群衆を漸く整理して居る状態であるが、石階下よりの参拜は拜殿高き爲め、本殿を拜する事を得ず、物足りぬ感を與へる。拜殿は大衆参拜の出来る様に、拜殿前石敷面積を廣く取るとか、又は參道と略々同じ高さに建設して、拜殿前廣場の利用を可能ならしめ、且つ参拜路も行詰りの袋道とせず、左右に巡廻して退去出来る様な方策を立てる事が必要に思ふ。(樞原神宮御造營には此の點頗る考慮せられて居る。)

5、玉垣並神門、南及東西の玉垣鳥居、並に之に對する三神門の夫々入口幅員が狭少に過ぎ、一日數十萬人に達する参拜者を見る時は、玉垣内及廻廊内に人々が参進する事が出来兼ねて、玉垣内外の混雜は言語に絶し、群衆の犇めく有様頗る危険にして、恐れを感じ止む

百 萬 人 の 参 拜 者 (昭和五年例祭)

なく参拜を中止し、満たされざる心を抱いて歸る人々が、相當多く見受けられるのは、甚だ遺憾に堪えぬ次第であつて、萬一負傷者等を生ずる事あらば洵に申譯なき事と思はれる。之が對策としては、鳥居兩側の玉垣を切開き、且つ各神門左右に脇門を増加し、階段及渡り板を増設して、祭典當

日夫々通行を可能ならしめ、参拜大衆が停滯なく流過する様に誘導する事が必要である。

巾十間の南参道に對するに、有效幅員僅か17尺4寸に過ぎぬ南玉垣鳥居や、比較的小模様な南神門の如きは共に明治神宮に相應しからぬ小規模なものと評せられて居る。(本件に關しては昭和11年に前記の如く改造せられて大衆参拜の際の混雜緩和に供して居る。)

6、東手水舎、東玉垣外の苑路は御造營當初の目的は、社務所、御社殿間の職員用間道として、狹少な苑路を林間に配置してあつて、手水舎の備もなかつたが、参拜者の増加と共に、北参道に通ずる捷路として日増に利用する者多く、之より参入する人々は口や手を濯がず参拜する事となり、洵に不完全な狀況であつたので、遂に昭和4年東玉垣鳥居外の林間を整理して廣場を設け、西手水舎と同形の東手水舎を新築し、苑路も之に相應しい様に擴張改造を行つたので、漸く参道としての設備整ひ、参道の風致も改善せられ脇参道と名付けられ、大衆参拜の折は専ら退出路として利用し、重要な参道の一つとなるに至つた。尙此の苑路の延長として、東池南沿の北参道より車道に至る間の苑路擴張改良工事が必要となり昭和11年實施された。

7、休憩所、御鎮座當時は参拜者休憩の設備が皆無であつて、而も入口下乗以來御社殿迄 7—8 町も砂利道を歩行せねばならぬ爲めに、一般参拜者に取つては少なからず困難を感じ、且つ學生團體等の休憩食事場も皆無の事とて、甚だ不便であつた。其處で大正12年に南参道御橋北、東側に南休憩所を、昭和4年寶物殿西側に北休憩所を新築し、夫々に廣場を設け、之等の廣場並に参道沿適宜の個所に130個の腰掛を新調配置し、参拜者休息の便に供して居る。其の結果春秋修學旅行の頃は、兩休憩所共學生團體の利用頗る多く、今日では既に狹少を感じる程である。

8、守衛本部、御本殿西側の守衛本部は假設物にて、頗る不完全であつた爲めに、昭和7年本建築に改造するに至り、境内各種の警戒や各入口守衛詰所其他との連絡統卒に甚だ便宜となつた。又同所の消防ポンプ室も、風致上地下室なりし爲めに、室内過濕となり發動機に故障續出し、萬一の場合甚だ不安であつたので大改造を行ひ、地上に改築し、社務所側大貯水槽の新設と相待つて、消防設備も次第に改善せらるるに至つた。

9 苑丁詰所、林苑管理上必要な苑丁詰所は、永らく一定の建築物を有せず、作業に不便を極めて居たが、漸く昭和9年に黒門附近柿苗圃沿に、建坪30坪の林苑倉庫の新築を見るに至り、其の傍に假設苑丁詰所を設け、漸く職夫の休憩所、雨天作業場を有する事となり、林苑管理上頗る便宜となり、作業上も頗る能率をあげ得る様になつた。尙社務所南側にも一倉庫を増設して、營繕關係の使用に供して居る。

10、神符奉製所、其他の建築物としては、舊御殿の北側に、神符奉製所を完備し、御神符類の奉製に當てて居る。以上列記した建設物の築造に當つては、夫々の林間支障樹木除却、排水工事、苑路廣場築造、苑地々拵、風致樹木植栽、植芝等造園的附帶工事を施行し、既存の風致を損せざる様考慮してある。尙建設物の内、改善を要する所尠ならず、自動車々庫、便所、官舎、水飲場等の不備不足等、考究改善すべき餘地が未だ多い。(便所は昭和12年南參道より南小路に入る附近に一箇所増築せられて大いに便利となつた。便所の不足は女學生徒等は卒倒を招く事さへあり、大衆的に衛生的に充分考慮を要する。)

三、參道並に苑路

境内參道は、南參道8間、北參道6間、大前參道10間、西參道、寶物殿道、車道等何れも4間の幅員を有し、比較的規模雄大にして、支障を感じる事が尠い、併し之亦明治節及び元旦の初詣の際は、充分とは云ひ難く、參道より溢れて、道沿の林間に侵入し、休憩若くは通行に利用する者が、年と共に増加し、參道沿刈込野笹を踏み荒さる事多く、野笹の保護手入には少なからざる苦心を拂つて居る。又近年新宿方面の大發展の結果、西參道を利用する參拜者増加し、殊に明治節當日は氣候快適な爲めに參拜後、西參道を経て寶物殿方面に出づる者も頗る多く、西參道4間の幅員にては狭少を告げ、混雜を極め、昭和5、6年頃より11月3日には林間及び芝地に侵入して通行、休憩等に供用する事が常例の様になるに至つた、社務所にては止むなく、一定區域を限り、繩張等を施して、當日のみ芝地に入るのを默認する事にして居るので、參拜者は大喜びで緑の芝生を歩む楽しさを享樂して居る。芝生の生長の停止する秋期の事とて、芝地の損傷は比較的に輕いが、紙屑類を散亂せしめたり、林間に侵入して樹枝を折る等の弊害も仲々あるので、之が對策を考究する必要がある。猶ほ近き將來御本殿御屋根替等の際に必要とする權殿に至る參道計畫は、現存のものは狭少に過ぎ、大衆

参拜者を如何に流通せしむべきかは今後の大問題である。

1、参道排水設備、 参道の排水設備は南、北参道及車道の全部、並に西参道及寶物殿道の芝地沿部分には側溝若くは雨水枡を設け、排水管を埋設してあるが、他の苑路には排水設備を缺き、特に所謂林間道路には全く排水に對する對應策無き爲、路面は樹蔭に依り多濕となり、冬期凍上等に依る損傷著しく、又傾斜苑路の如きは、降雨の度に路面を浸蝕せられ、年毎に破損せらるる處多く、是非共排水設備の必要があるので、漸次西参道社殿附近、脇参道、休憩所、舊御殿の一部等に排水設備を増設したが、尙將來補修改築すべき苑路が頗る多い。

南参道の側溝は、徑1寸、長3—4寸の長目の玉石を、巾3尺通り縦並べに固定せしめた、洵に神社参道に相應しい理想的な趣ある構造であるが、之に附屬した雨水枡は塵除金物が固着して居り、枡内掃除、浚渫の方法無く、降雨に依る参道化粧砂利の流入、並に大衆参拜の際の化粧砂利蹴込等に依り、通水不能となれるもの4—5個に達し、現状の儘にては手入方法無き爲、故障を生ぜる雨水枡を改造して、参道側に雨水枡の擴張を行ひ、参道縁刈込野笹を損傷せずして、雨水枡の掃除を行ひ得る様改造を行つた。

又既存の参道大排水管の末端が、林間内に開口し垂れ流しとなれる部分多く、降雨の都度、其の溢水に依り、林間内を荒らされるので、之が流溝を整へ、庭石等を配して改造を行つた。總じて造園計畫に於ては、排水の點を充分考慮して施工すべきものであつて、其の適否は爾後の維持管理上甚大なる影響を及ぼすものである。

2、自動車の影響、 明治神宮御鎮座當時は、未だ自動車は大衆的の乗物でなかつたので、之に對する配慮を缺き、南参道入口廣場1,000坪、北参道入口廣場500坪、社務所前廣場200坪にては今日の自動車發達に對して、何れも狹少を告ぐるに至つた。即ち春秋参拜者多き季節には、自動車の整理頗る困難にして、歩行参拜者にも頗る危険であるので、明治節、新年等の大衆参拜者ある時は、特別に警官の警戒配置を依頼し、境外街路の適當の廣場にて自動車を止め、漸く整理を行つて居る。南入口の如きは外圍土壘外に車溜廣場あるを便とし、若し省線電車線路上を覆蓋して、駐車場に供用が出來れば理想的であらう。

境内車道通行の自動車も年々増加する爲に、路面の破損と、濛々たる塵埃の飛散甚しく、特に車道沿の舊御殿、社務所、南休憩所等に被害多く、神域を穢す事尠ならず、爲に止むなく車道のみは簡易鋪裝を計畫し、昭和10年東京市に依頼して施工を見た。神社境内に鋪裝を行ふが如きは、假令車道と雖も、風致上好ましからず、砂利道に越した事は無いが、文明の利器、自動車の利用普及に依つて、昔ながらの面影を維持出來兼ねるに至つたのは遺憾であるが止むを得ない處である。

3、撒水設備、 境内参道は神社境内に相應しい取扱として、路面に化粧砂利を敷均せる

砂利道であつて、毎年三分砂利並五分砂利を合して、50立坪の化粧砂利を購入し、補修の用に供して居る。砂利道は神社林苑の縁に對應して、如何にも清々しい風致を感じしむるが、歩行者には比較的歩みにくく、疲勞を覚えしむるし、又大衆參拜の際には塵埃の飛散甚しく、參拜者につつて非衛生でもあり、又神宮境内の清淨さを損ふ事ともなるので、何か適當な對策は無いかと、石敷鋪裝其他を研究して見たが、神苑に相應しい施設として色々議論もあり、經費の問題もあつて結局撒水を屢々行ふ方法を取る事となつた。

撒水を行ふにしても、神社境内に撒水自動車や撒水手車を通す事も憚り多いので、神橋下流の河床に沿ひ集水槽、送水ポンプ室、壓搾タンク室を設け流水を汲上げ、參道に鐵管を埋設して、所々に撒水口を配置し、之にホースを連結して、70封度の水壓力にて撒水する事となつたが、旱魃の際、水源の點が不充分であつたので、更に集水槽の側に深井戸掘鑿を行ひ、給水量を確實ならしめた。

4、車道、神社境内の參道に於ては、普通參拜者の乗物、車類の通行を原則として禁止して居る事は、社頭制札に明記してある。明治神宮境内22萬坪に於ても同様であつて、唯一の車道として省線沿に一本配置せられ、社務所出入の車輛が通行を許されて居るのみである。依つて境内の維持管理上、樹木移植、工事材料運搬等に甚だ不便が多い。若し外圍に沿つて、境内を一周して車道が配置せられ、或は此の車道より分岐して、鳥居下を潜る事なく、境内各方面の苑路に連絡し得る様に道路計畫が配置してあれば、境内の經營、作業上の便宜は計るべからざる程大である。相當面積の苑地計畫には是非共此の種の考慮を拂つた道路系統の配置を必要とする。境内車道不足の爲めに、御社殿より遠距離にある寶物殿に赴くには甚だ不便であり、拜觀者が比較的少ないのも之に原因すると思ふ。寶物殿の如きは附近迄乗物の便が得られる様に計畫すべきであらう。

5、照明裝置、境内苑路の照明は、南北兩參道の燈籠には地下ケーブル線が配せられ、電燈を點じてあるが、他の苑路の燈籠は風致上の化粧燈籠で點火が不能であつたが、夜間參拜者の増加に伴ひ、警戒其他に夜間照明の必要を生じたので、玉垣周圍、西參道、脇參道、櫻小路等の燈籠に地下ケーブルを以つて配線を行ひ、又祭典當夜玉垣内臨時設置の大提燈九對にも電燈を點じ得る様になつたので、大いに夜間參拜の便宜、安全を増加した。従つて祭典の神賑として例年行はるる菊花や、生花奉納の臨時施設の小屋組陳列場にも夜間照明を行ふを得るに至つた。

四、外 圍

明治神宮の境界外圍は石垣土壘を取り廻してある。偶々大正9年の大震災に依つて、鐵道沿線外圍を除き他は全部大破せられた爲に、繼續的に復舊工事を行ひ再築した。鐵道沿線外

圍は鐵道省の築造になり、悉く裏込コンクリートを施してあつた爲に、震災にも故障を生じなかつたが、他の部は全部空積であつた。施工に際しては合場其他に嚴重なる監督をなして積み上げたが、一度の震災に崩落を見せた。前者は實用本位、後者は風致本位より築造せられたものと思ふが、結局に於て空積は如何に入念に施工しても永續性の短い事を示した。

尙ほ土壘の高さの問題であるが、土壘の低い部分よりは、不心得者が境内外出入の場所に使用し、惡事に利用せられし事もあり、又毎夜の如く附近の犬が侵入して、境内に生育する兎、狸、雉、小壽鷄等を襲撃するので、鐵條網等を張つて出入を防いで居るが不充分である。今少し石垣を高く圍むとか、假令空堀でもよいから、周圍に溝堀を配して置けばと思はれ残念である。

明治神宮に於て最も遺憾に堪えないのは、代々木練兵場よりの猛烈な砂塵である。天氣續きの頃、稍強い南風が吹く時は、隣接練兵場にて生ずる、赤土の砂塵が猛々として神宮境内を襲ひ、樹林と云はず、御苑、參道と云はず、果ては玉垣内御社殿迄も猛然たる砂塵に包まれ、一間先も見通せぬ程の事すらあつて、參拜者にも甚だ敷く不快を感じしめ、社務所内にて、事務を執る上に支障を生ずる程である。御社殿の清掃には職員が特に盡力して居るが、一朝砂塵に襲はる時は全く徒勞となり、御祭神に對し奉り誠に恐多きを感じる次第である。又林苑樹木も爲に甚だ有害なる被害を受け、西側土壘沿樹木の如きは生育不良の狀況の處がある。願はくば、陸軍當局に於ても、然るべき方策を立てられ、或は練兵場内撒水の方法を講じて、芝草類を植栽し、又は防塵樹林を補植し、物理的に砂風の勢力を弱むるとか、或は周圍に鋪裝道路を廻らして一般通行の車馬を誘導して、練兵場内通行を禁ずる等成るべく練兵場内より砂塵を生ずるを妨ぐる方法を考究して戴き度いと思ふ。

東側外圍沿の省線貨物列車より發する煤煙の害は、毎年數回宛、外圍土壘枯芝草に飛火して野火を起し、又樹木の病蟲害、枯損等の發生を見相當の惡影響を認めたので、鐵道省に改善方を依頼した處、昭和9年10月頃より煉炭を使用する事となり、相當好結果を示して居る。電化が理想的であるが之は他の事情より困難の模様である。

五、池 泉

明治神宮境内には、舊御苑内に南池、舊御殿附近に東池、寶物殿前に北池の三個の池がある。苑池面積合計4,653坪である。神社の池泉の特徴としては、必ず崇敬者が放魚する爲に、次第に魚數が増加して行く事である。されば池泉築造に際しては豫め放魚を豫期して、必ず魚溜の築造、水源の保存及魚類の飼料の點を考究して置く事を要する。明治神宮に於ては昭和8年の大干魃に際して、清正井戸の湧水止り、各池共約3尺減水を見、遂に南池水深1尺、

東池と北池は池底露出し、鯉其他の魚類保護に大困難を感じ、應急處置として、深3尺、4間四方の魚溜を東池に1個、北池に2個新設し、東池には水道を晝夜補給して漸く夏期を過すを得たが、北池は池が新しい爲に魚溜増設も效無く、水道補給も遠距離の爲補水困難で、鯉は悉く南池及東池に移した。當時の北池々底の地割甚しく、昭和9年中も満水するに至らず、平均1尺減水であつて池尻方面に地割に依る漏水があるものの如くである。北池水源の爲には造營局に於ても各處に井戸掘を試みたが成功を見なかつた。都會地に於ては湧水量漸減の傾向が顯著であるから、將來は水道等にて補水の方法を講ずる必要がある。

池泉の維持管理上、護岸の構造は甚だ重要な問題である、永い間の水浸に依つて板柵や、亂杭等は腐朽崩落を見、池邊の樹木の倒伏するに至り、切角幽邃の風趣も損せらるる事が多い。舊御苑内南池の如きも護岸不完全の爲、松亂杭を相當間數補修したが腐朽の恐れが無い石類を以つて護岸が出来れば將來の維持管理上は最も經濟的である。然し其の手法に色々困難な問題があり又築設當初の經費に多額を要する處に實現困難な譯がある。池泉は造園上甚だ好ましい重要な施設であるが、もつと研究すべき點が多い。

結 語

林苑管理に關しては詳細に説明すべきに付、次回に説述する豫定である。

要するに維持管理の問題は極めて地味であつて、動もすれば荒廢に傾き易く、而も築造當時の狀況を維持して普通と考へられ、更に樹木等の生育に依つて境内風致が漸次良好となつても、夫が當然の事と思はれる、然るに實際は風致の現状維持のみにても、相當の努力を要し、多少の改善進歩を結果する爲には、並々ならぬ苦心を要するものである。多くの場合、創造の際には經費も充分存するが、維持管理の際には經費不足となるのが通例である。輕少の經費を以つて維持管理を行ひ、缺陷を現さぬ爲には、人知れぬ苦心を拂ふ必要がある。新設創造の華々しさに比して、維持管理に於ては忍耐的、犠牲的努力を要する點を充分認むべきものと思ふ。

猶ほ、相當の維持管理を経験せし者にして、初めて林苑設計の妥當性を得べく、維持管理現場に経験の無い者の設計の如き、動もすれば、机上の理想のみ高く、完成後の維持管理に思遣り乏しく計畫せらるる傾向多く、大いに戒心すべきであらう。計畫の最初より將來の維持管理の便宜を充分に考慮して設計施工してこそ、完全なる計畫と云ふべきである。

〔昭和十五年四月五日 日本造園學會講演〕